

認知症の早期診断

早期診断のために、日常診療の中でどのような点に留意すべきでしょうか

回答者 森 敏

認知症、とくにアルツハイマー型認知症の早期診断では、記憶障害の内容に注目することが大切です。

認知症への道のり

1) 認知症とは何か

認知症といえはどのようなイメージをもたれるでしょう。もの忘れがはなはだしくなった状態を想像されるかもしれませんが、実はそれだ

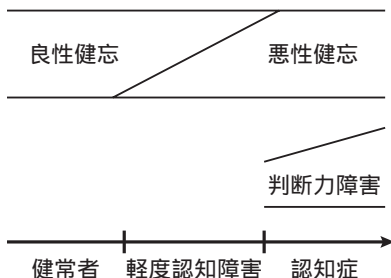
けではないのです。正しくは、成人になってから起こる「記憶と知能の障害」をいいます。

記憶障害はもの忘れのことですが、知能の障害とはどのような状態が想像しにくいのでしょうか。これは判断力の障害と考えてよいものです。われわれは朝起きてから夜寝るまで、その都度、適切に判断を下し生活しています。認知症ではこの判断が適切に行えなくなるのです。その結果、社会生活に支障をきたします。社会生活が障害されていることも、認知症の要件です。

2) 軽度認知障害・認知症の前段階

認知症は、上に述べた2つの要素・記憶障害と判断力の障害・からなりますが、これらの障害が同時期に生じることはないのです。まず記憶障害が起こり、その後判断力の障害が加わります。つまり、認知症になる前には、記憶障害のみが見られ、判断力は保たれている時期が存

①認知症への道のり



健常者は、軽度認知障害の段階を経て、認知症に移行していく。軽度認知障害では、判断力が保たれており、記憶障害のみが認められる。ただし、この記憶障害は、健常者より著しく、また質的に異なる。

良性健忘と悪性健忘

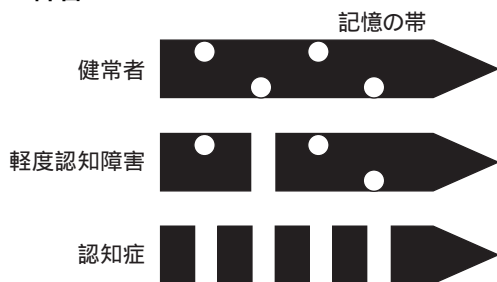
記憶障害が見られる場合、「記憶障害の内容が問題になります。なぜなら、記憶障害そのものは、歳をとれば誰にでも認められる現象だからです。そこで、「健常者のもの忘れ（良性健忘）」と認知症や軽度認知障害で見られる「病的なもの忘れ（悪性健忘）」の違いを知っておく必要があります。

「病的なもの忘れ」の特徴を一言でいいますと、それは「すっかり忘れている」ことです。

在するのです。この時期の記憶障害は、健常者と比べると著しいものの、判断力に問題がありませんので社会生活は保たれています。そこで、認知症とはいえません。このような状態を、「軽度認知障害 (Mild cognitive impairment, MCI)」と呼びます (図①)。健常者がいきなり認知症になるのではなく、軽度認知障害という段階を経て、認知症に移行していくことをご理解いただきたいと思えます。

たとえば、わたしたちでも朝食のおかずが何だったか思い出せないことがあると思います。しかし、朝ごはんを食べたことを忘れることはありません。認知症では朝食を食べたこと、それ自体をすっかり忘れてしまっています。ですから食後まもなく、「ごはんはまだか？ 私はまだ食べていない。」などといったりするので、このように、「健常者のもの忘れ」は体験の一部に限られています。認知症では体験の全体

② 健常高齢者・軽度認知障害・認知症の記憶障害



健常者(上段)では記憶が部分的に欠けている(良性健忘)。認知症(下段)では記憶が完全に欠落している(悪性健忘)。軽度認知障害(中段)では両者が混在している。

が頭に入っていない。「病的なもの忘れ」は、認知症の最も本質的な症状です。

記憶障害はどのように進んでいくのか

健常者から軽度認知障害を経て認知症へと進行する過程で、記憶障害がどのように進展して

いくかを模式図で示しました(図②)。健常者では、記憶の帯がとどころ部分的に欠けています(良性健忘)が、完全に欠けている部位はなく、記憶の帯はつながっています。一方、認知症では、記憶が完全に欠落しており(悪性健忘)、記憶の帯がいたるところで寸断されています。両者の間に位置する軽度認知障害では、記憶が部分的に欠けている部位と、完全に抜け落ちている部位が混在しています。両者の割合は病気の進行と共に変化し、完全に欠落している部位が少しずつ増加していくものと考えられます。

以上述べましたように、認知症の早期診断では、記憶障害の内容に注目し、「病的なもの忘れ」があるかどうかを確認することが重要です。

(松下記念病院 神経内科 部長)